

入江隆則

文学の沙漠のなかで

新潮社版

文学の沙漠のなかで

入江隆則

新潮社版

ISBN 4-10-302703-7 C0091

©Takanori Irie 1985. Printed in Japan

文学の沙漠のなかで

一九八五年六月一日 印刷

一九八五年六月二〇日 発行

定価／一五〇〇円

著者／入江隆則

発行者／佐藤亮一

発行所／株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(03)二六六―五一二一
編集部(03)二六六―五四二一

郵便番号一六二

振替東京四―八〇八

印刷所／三晃印刷株式会社

製本所／株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

文学の沙漠のなかで・目次

第一章 忍びよる沙漠の影

7

頽廢から沙漠へ 現代人のユダヤ人化 沙漠
に直面した文学者たち

第二章 亡命者と二重国籍者——ナボコフと立原正秋

21

一、亡命者・ナボコフの孤独

牢獄としての時間 恥知らずな亡霊たち ド
ッベルゲンガーの幻影 伝記の不在 苦いユ
ーモア

二、立原正秋と枯野の夢

褐色の枯野 混血のはざまで シニシズムと
サディズム 「遊び」と「荒び」 自己破壊の
衝動 沙漠のメルヘン

第三章 沙漠のニヒリズム——ペロウと村松剛

83

一、滅亡の証人・ペロウ

野性の文體　ごった煮のなかで　強靱な破滅者　ユダヤ的父性　ユダヤ人のユダヤ人化　色情狂の祝祭　それでも存在している人間　終りを待ちながら

二、村松剛とニヒリスムの超克

死との対話　ニヒリズム以下の人間　無が貪り尽された後で　歴史の贗造　日本人の死の伝統　人間になにができるか

第四章　宗教による救済は可能か——石原慎太郎と高橋たか子

一、蘇生への情熱・石原慎太郎

ブラックホールの凝縮　仮死的状況のなかで
嫌悪という武器　化石の森の鎮魂歌　超人と
不具者　心霊の存在　現実に抗して

二、高橋たか子における悪と、その裏側の神

光の条件としての汚れ 母性の拒否 孤独な
少女の夢想 自己への帰還 悪の果てへの
旅 沙漠の裏側の光

第五章 沙漠のなかの「天皇」——三島由紀夫

三島由紀夫の自裁と天皇論のゆくえ

最後の写真 屍骸にみちた生誕 精神の虚妄
と肉体の虚妄 文武の包摂者としての天皇
死による自己の社会化 何処へ

あとがき

初出一覧

文学の沙漠のなかで

装画
富岡惣一郎

第一章 忍びよる沙漠の影

頽廃から沙漠へ

二十世紀の世紀末に向って、沙漠の影が忍びよっている。

百年前の十九世紀の世紀末には、文化のさまざまな局面で「頽廃」が語られた。しかしこの頽廃は、もはや遠い昔の甘い夢のように見える。かわってわれわれが今、目のあたりにしているのは「沙漠」である。十九世紀の人々が、かれらの頽廃のあなたに何があるかを知らなかったように、われわれはこの沙漠のあなたに何があるかを知らない。

頽廃から沙漠への、百年かかった乾燥の過程は、もしかすると人体の腐肉の分解がすみ、白骨化し、さらにそれが風化するプロセスに対比できるかもしれない。ドストエフスキーからボードレールまでの数多くの十九世紀の文学者が、ひとしく「腐敗」に関心を寄せていたのは偶然ではなかった。同様に、今日の多くの文学者はさまざまな異った経歴のなかで、沙漠を発見している。これもまたおそらく、偶然ではないはずである。

今ここで、十九世紀の人々の腐敗への関心を、如実に示す例を一つ選ぶとすれば、ボードレールのそのものずばりの詩「腐肉」であろう。

《恋人よ、思い出してごらん、爽やかな夏の朝、

ぼくたちの見たものを。

小路の曲がりかど、砂利を敷いた寢床に

醜い腐った死体が、

みだらな女のように 足を空に上げ、

焼けただれ、毒気を放って

しどけなく厚かましい姿で

悪臭のみちた腹をさらけだしていた。

太陽はこの腐った肉を照らしつけ、

ほどよくそれを焼きあげて、

大自然が結び合わせたものをなにもかも

百倍にして返そうとするためかのように。

大空はこの壮麗な死体を

花が咲くかのように眺めていた。

悪臭が激しくて あなたは草の上に

気を失って 倒れそうになったほど。

腐った腹の上には、青蠅が唸り

蛆虫が黒い列を作って現われ

濃い膿のようにどろどろと

この生きたぼろを伝わって流れた。

どれもが波のように沈んでは高まり

ばりばりと突き進む、

肉体はかすかな風に膨らみ

増殖しながら生きているかと思われた。

そしてこの世界は 異様な音楽をかなでる、

流れる水や風のように、

篩い手が調子をとって箕のなかで

揺すぶり動かす穀粒のように。

（以下略）（佐藤朗訳）

十九世紀の世紀末の文字は、レニエからワイルドまで、あるいはラフォオルグからマラルメまで、この「壮麗」な腐肉の上で「悪臭のみちた腹をさらけだして」、それぞれの「異様な音楽をかなで」たのである。したがって批評もまた、以後死体分析の別名のごときものとなり、批評家は

「流れる水や風」のなかに鋭敏に屍臭をかき分ける秃鷹のような鼻と、腐肉の「毒気」にもひるまない、はいえ、な胃袋とを要求された。かつて二十世紀の初頭に永井荷風や谷崎潤一郎が耽溺し、上田敏が日本語に移そうとつとめたのが、この頽廢の美だったのはいうまでもない。

だが、以来一世紀たつて「腐肉」は分解とともに風化し、急速に乾燥していった。周知のように化学的分解過程としての腐敗は、バクテリアの作用による蛋白質の加水分解であつて、水分の存在が必要条件である。人間は幸か不幸か腐臭にさえ酔うことのできる存在で、百年間有機物の還元過程としてのエロティシズムに陶酔してきたが、これだけ水分が蒸発してしまつては、もはや蛆虫うしむしさえも寄りつけない。さらさらと流れる沙漠の砂が相手では、どんな頽廢も不可能である。

現代人のユダヤ人化

沙漠には悲しみがない。

糜爛ひらんしはじめた屍体に対してなら涙を流すこともできようが、白骨となつて風化しはてた無機物を前にしては、痛恨や畏怖は感じられても、泣くことはできない。そこに遍在するのは喉を灼く渇きだけである。

たぶん十九世紀的な「頽廢」と現代の「沙漠」のちょうど中間地点に位置するのは、「荒地」と題した詩のなかで「水のない岩と砂の道」をうたつた詩人T・S・エリオットだったとも言えるだろう。

《ここは水なくただ岩あるのみ

岩ありて水なく砂の道のみ

この道は山の背をうねりゆく砂の道

この山は岩のみありて水なき山

水あらばわれら停りて飲まんものを

われら岩の中にては停り得ず考うあたわず

汗は乾き脚は砂中に埋まり

岩の中によし水ありとも

腐蝕せる齒根の死の山の口、唾はくあたわず

ここに立つあたわず臥すあたわず坐すあたわず

山にありて静寂さえもなく

乾ける不老の雷鳴に雨なく

山にありて孤独どくかくさえもなく

ひび割れし泥壁どろかべの家の戸口より

赭あかき憂憤の顔と顔、嘲り唸るあり、

岩なきことあらば――

もし岩ありて

水またあらば

そも水

泉

岩のなかなる水溜り——

ただ水音のみにてもあらば——

蟬にも非ず

枯草の歌にも非ず

隠者鶉^{つぐみ}の松林の鳴くところ

ただ岩わたる水音のしたたりあらば

ポッ ポトッ ポッ ポトッ ポトッー ポトッ ポトッ

されど一粒の水もあることなし

(以下略) (深瀬基寛記)

この詩が書かれたのは、まだ一九二〇年代のことだったが、以後世界の氣候はじりじりと乾燥の度を加え、沙漠への道をひた走ったかに見える。實際文学者のみならず、現代の多くの著作家がさまざまな分野でひとしく「沙漠」と呼ぶべきものに行き当たっている実態は驚くほどで、ここに注目しに値する人間の問題があると言わなければならない。

そのほんのわずかの例をあげれば、反ヒューマニズムを極限にまで推し進めた現代のある哲学者は、その昔世界各地の神話が等しく告げていた人間離脱の世界観を回復すべきだとして、こう述べている。

《真のエデンの園——それは悉皆無の沙漠だ。歴史の目的——それは風化する廢墟の野面だ。意

味——それは頭蓋冠下の眼窩を吹き抜けてさらさらと流れる砂である。》(ウルリヒ・ホルストマン「人間怪物論」加藤二郎訳)

また現代のある経済学者は、そんなおどろおどろしい神話の世界に還るまでもなく、現にわれわれの住んでいる二十世紀末の消費社会そのものが、果しなくコマ・シヤリズムの嘲弄にさらされ続ける沙漠だとして、こう書いている。

《資本は、価値と同様無責任で、非可逆的で、不可避である。資本だけが幻想的な自己崩壊のスペクタクルを演じられるのだ。——宗教の亡霊が久しく神聖視されなくなった世界を見おろしているように、知の亡霊が大学を見おろしているように、資本だけが、資本の古典的構造の沙漠、価値の亡霊を見おろしている。この沙漠の民となるのはわれわれである。価値の機械的な幻想をぬぎすて、資本よりも、資本の死がわれわれにもたらしたものよりも流動的で模倣的な動物や生き生きとした亡霊の誠実さと共に、われわれは沙漠と蜃気楼の奇妙な不安につつまれて生きるだろう。——なぜなら、都市沙漠は砂の沙漠と同じであり、記号のジャングルは森のジャングルと同じで、瀕死のシステムのまばゆい誘惑が生き残っているだけだからだ。》(ジャン・ボードリヤール「シミュラクルとシミュレーション」)

また現代日本のある神学者は、国籍が何であれ現代人はすべてユダヤ人化していると述べ、この「ユダヤ人」という概念は「象徴的概念」であり、ユダヤ人のように「旅人的であり、故郷喪失的であり、そして貨幣経済的となっていく」(大木英夫「現代人のユダヤ人化」という意味だと書いている。これもまた、現代人が沙漠の民であることの別の言い方であるように見える。なぜなら「ユダヤ人」とはなによりもまず、シナイ半島の沙漠で定住地を持たない亡命者だったからであ